

View18: Inspire a generation

ロンドン五輪は、近代スポーツ発祥の地イギリスらしいメッセージに満ちあふれていた。Inspire a generation もその一つだし、開会式のうんちく解説や IOC 会長のロゲ氏のメッセージで知ったのだが、クーベルタンの近代五輪の考え方自体、イギリスのマッチウェンロックで行われていたスポーツ大会に感化されたものだという。スポーツマンシップという概念もイギリスで生まれたものだ。決勝トーナメントを有利に運ぶためのバドミントン予選リーグでの無気力試合に対する措置も、イギリスでなければあそこまで問題にならなかったかもしれない。メダリストの入場の音楽が「炎のランナー」だったのにも泣けた。

もとよりロンドン五輪の招致にあたっては、大会実行委員長であるセバスチャン・コー(1980年代を代表する 800m、1500m 走者であり、その後国会議員となった)の感動的な演説によって優勢だったパリに最後に逆転したという経緯がある。この時の演説は次のメッセージから始まる。「一人の五輪チャンピオンが誕生する背後には 8 人の決勝進出者がいる。その背後には 80 人の五輪選手がいる。80 人の五輪選手の背後には 202 人の国内チャンピオンがいる。202 人の国内チャンピオンの背後には数千人のトップアスリートがいる。そしてその背後には数百万人のスポーツに感化された子どもたちがいる。」彼は、日の目があたるチャンピオンだけでなく、そこから底辺の選手、そしてそれを担う未来の子どもたち全てをつなぐスポーツの物語を提示したのだ。五輪のモットーの inspire a generation という言葉の背景もそこにある。実際ロンドン五輪は大会の陰で、若い世代をスポーツに感化する活動を続けていた。

偉大なチャンピオンが次世代を感化し、成長した世代がチャンピオンを追い越していく。北島と日本のメドレーリレーチーム、なでしこの沢と宮間の関係も、絆というよりは、「世代を超えた感化」という言葉の方がしっくりくる。競技力としても文化としてもスポーツは引き継がれ、発展していく。ロンドン五輪のモットー Inspiring generation も、至るところで感じられた。

熱戦が終わりに近づいたころ、僕は

鳥取にいて、地域創造類型の高校生たちを主たる対象に、オリエンテーリングの普及研修を行っていた。オリエンテーリングをイベントに活かすとすれば、それをどう使うか？ 彼らはこのワークショップのテーマに真剣に取り組んだ。鳥取大学地域学部の学生や古参のオリエンティアたちが、彼らのグループワークを支援した。そこでもまた世代を超えた感化を感じることができた。世代を超えた感化、そこにスポーツ発展の鍵も、その発展を充実に満ちた暮らしにつなげる鍵もある。

View19: インターハイ登山

前号でも触れたインターハイの登山競技を視察してきた。コースは新潟の名峰苗場山である。山頂に広がる湿原が楽しみだ。実行委員の一人である新潟県の笛木君の協力が得られたので、選手のごく間近でその行動を見ることができた。笛木君は筑波大オリエンテーリング愛好会の OB でもある、新潟の高校教員だ。

男子は 47 都道府県の全代表が揃っている、それだけでも約 200 人。それに大会主催側のメンバーが班長や隊長、サポート隊としてはりつくので 250 人近い集団での登山になる。選手は行動中、要所要所で、その場所での天気や気温、周囲の様子などをメモに残さなければならない。また、読図問題も出題され、旗がおいてあるポイントで、その位置を地図に記す。行動中は両手をあけていなければならないから、歩きながら地図を見ることはできず、次に休憩する時までそのポイントを覚えていなければならない。さらに、登山中は、随所に審査員がいて、歩き方その他をチェックしている。キャンプサイトに戻ると、テント設営の審査もある。

これが登山か？と言われると、確かに疑問が残る。おまけに、本来は山で安全に行動するために必要な天候や周囲の状況の観察も、機械的に要求されてしまえば、「なんのためにやるのか？」という意識は薄れがちになるだろう。

地図読みにしても、コースはすでに公表されているので、近隣県や強豪校は何度も下見に来る。オンサイトの判断とは言い難い部分もある。そんな批判はかなり前から登山界の中でもなされているので、僕もかなり批判的な視点で視察を開始したことは否めない。

選手たちがやっていることは、すでに知り得た情報の通りだった。これだけの集団がシングルトラックで、少なくとも登山者とすれ違うのもどうかとも思った。その一方で、読図課題は、かなりシンプルかつ基礎的であり、「山で安全にナビゲーションするのなら、最低これくらいは読めるようになってほしい」という主催者のメッセージが明確になる良問だった。地図も国土地理院から登山道に関する GPS データの提供を受けているので、登山のスケール感ではほぼ正確と言える。これなら、下見も関係ないし、トリッキーな出題もない。これは笛木君が課題づくりの基礎的な部分に関わったことも大きいのだと思う。こうした地図とポイント設定がスタンダードになれば、登山の読図で何が必要か、が明確になるし、なにより読図のおもしろさを理解しやすくなるだろう。

一般登山とはかけ離れた形態も、教育活動と思えば納得がいく。近年、山ガールという言葉に代表されるように、初心者の方に対する敷居は低くなった。一方で、自然の中で自分の身は自分で守るという意識が低い登山者が増えたことも指摘される。そういう中で、スタンダードを提示し、習得する目標となる場を提供することには意味があるだろう。インターハイという競技形式で提供することの是非は残るとしても。



インターハイ新潟大会での登山風景。



審査された天気図や読図問題を見て顧問の教員の評価を受ける登山部員たち。

(村越 真)